

「日韓聖公会宣教協働 30 周年記念大会」 共同声明

「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」（ミカ書 4：3）

日本聖公会と大韓聖公会は神の恵みと導きによって 2014 年 10 月 20 日から 23 日まで、韓国の済州島において日本聖公会首座主教・大韓聖公会議長主教をはじめ、韓国 3 教区、日本 11 教区の主教・司祭・信徒が参加して「日韓聖公会宣教協働 30 周年記念大会」を開催した。宣教協働者・女性・青年の代表らを含め、韓国側 36 名、日本側 51 名、計 87 名の参加であった。

両聖公会は 2004 年に福岡市で開催された「日韓聖公会宣教協働 20 周年記念大会共同声明」に基づき、10 年間にわたり、日韓聖公会青年セミナーや社会宣教に関する韓国スタディーツアーの実施、世界聖公会平和協議会の開催、韓国人宣教協働者の招聘など多様な宣教協働に取り組んできた。

日韓聖公会の宣教協働が深化する一方、昨今の日韓両国の関係は必ずしも良いとは言えない。領有権問題、「慰安婦」問題に代表される歴史認識など、両国の間には、依然として乗り越えなければならない様々な課題が横たわっている。日本においては、ヘイトスピーチや嫌韓文書などによって在日韓国朝鮮人をはじめ、マイノリティに対する悪質な犯罪行為が繰り返され、国連の人種差別撤廃委員会からも勧告を受けるような社会問題になっている。

1984 年からの公式な宣教協働 30 周年の節目にあたり、私たちはこれまでの宣教協働関係を振り返り、混迷状態にある時代状況を直視しつつ、この大会の主題である「生命・正義・平和」を実践するために、東アジアにおける両聖公会の役割について協議し、さらなる相互理解と宣教協働に取り組むことを決意した。ことに私たちはこの大会が平和の島である済州島で開催された意義と課題（軍事基地・自然環境・歴史）を深く認識した。

1 日目は、朴東信主教（大韓聖公会釜山教区主教）の司式、植松誠主教（日本聖公会首座主教）の説教によって開会聖餐式を捧げた。特に済州教会の子どもたちの特別賛美はすべての参加者を感動させた。植松主教の説教は、真の和解と平和の根拠となる「赦し」について改めて考えさせられるものであった。

2 日目は、「過去の歴史に対する反省と信仰的和解と赦し」というタイトルで梁権錫司祭（聖公会大学教授）の基調講演があり、続いて両聖公会のパネリストがこれまでの宣教協働の振り返りと 40 周年に向けた宣教課題の提案をした。それらを受けて参加者はグループ討議を行った。また、宮城県仙台市および福島県新地町で「ゆこう、核を越えて、東アジアの平和へ」というテーマのもとで開催された「2014 年日韓聖公会青年セミナー」参加者は、「東日本大震災被災者の苦難と痛みの実現を目の当たりにしつつも、その思いを分かち合う中で連帯する喜びに気づかされた」と報告した。

3 日目は、日本聖公会から憲法 9 条・沖縄・原発・ヘイトスピーチ、大韓聖公会から GFS 井戸のほとりプロジェクト（脱北女性支援）・TOPIK（Towards Peace in Korea、南北平和統一宣教）の現場報告があり、全体討議を通して共同声明文を準備した。

そして、私たちは大会中の聖書研究を通して、済州島と沖縄の軍事基地の課題を共有し、神は小さくされた者の側に立たれる方であること、またあらゆる被造物の痛みに関連することの大切さを確認した。

最終日は、4・3平和公園を訪問して「4・3事件」の痛みを心に刻み、犠牲者の追悼礼拝を捧げ、済州教会における青年たち司式の閉会礼拝をもち、「様々な課題に向けての迅速な実践を」という金根祥^{キムグンサン}主教の説教と、兪樂濬^{ユナクジュン}主教被選者（大田教区）の派遣の宣言をもって宣教協働40周年に向けた新しい一歩を共に踏み出した。

私たちは今回の記念大会を導いて下さった神に感謝し、今後の宣教協働の課題として、以下のことを決議する。

- ① 日本聖公会と大韓聖公会は、継続的な宣教協働のために管区レベルでの計画・推進のための機構を設置する。
- ② 両聖公会は、人種差別的・排他的極右運動に対する2014年の日本聖公会と大韓聖公会の総会決議を受けて、在日韓国朝鮮人をはじめとするマイノリティーの人権を守る働きを今後も継続する。
- ③ 両聖公会は、日韓の青年交流を活かして、東アジアの苦難と痛みを共にする青年活動に取り組む。そのために日韓両国の関係を越えて青年の主体的な交流を可能にする支援協力体制を整える。
- ④ 両聖公会は、沖縄・済州島における新たな軍事基地建設に反対し、「2013年第2回世界聖公会平和協議会 in Okinawa 声明」の具体的実践に努める。
- ⑤ 両聖公会は、「風の島を聖霊の島に」という、済州教会の宣教ビジョンを共有し、「生命・正義・平和」を求める共同の信仰的实践を模索する。
- ⑥ 両聖公会は、「宣教協働20周年記念大会共同声明」に掲げた女性の交流が不十分であったことを反省し、女性が互いに学び合い、協働できる環境を整える。そのための定期的な交流を進め、意思決定機関および諸委員会における女性の比率が30%以上となるように努める。
- ⑦ 両聖公会は、東アジアの平和のために南北統一への努力が重要な宣教課題であることを再確認し、TOPIK(Towards Peace in Korea)事業を通して積極的に協力する。
- ⑧ 両聖公会は、両国語による聖餐式を実践するよう努力し、真の多民族・多文化共生社会の実現を目指す。
- ⑨ 両聖公会は、世界聖公会の「宣教の5指標(The Five Marks of Mission)」を共有し、そのひとつである「創造秩序の保存と地球生命の回復と維持」のため、原発と放射能(核エネルギー)問題の深刻さを認識し、信仰の課題として取り組む。
- ⑩ 両聖公会は、日韓のみならず、東アジア地域を含めた歴史の学びを深め、互いの宣教方策を交換して神学・礼拝・宣教・牧会などの共同研究を継続する。
- ⑪ 両聖公会は、上記の課題を実現するために祈り、情報交換や財政確保に努め、その進捗状況を毎年確認し、10年後の2024年に上記の内容に対する評価の機会を持ち、それ以降の宣教協働についての協議を行う。

2014年10月23日 日韓聖公会宣教協働30周年記念大会
共同大会長 日本聖公会首座主教 植松誠
大韓聖公会議長主教 金根祥
参加者一同